

REACT

2020年12月号



国境なき医師団の医療活動は皆さまからの寄付で実現しています。



- 1 1月1日にMSF病院で元気に生まれたマナマニヤ君(エチオピア)
- 2 ICUでの看護師たち。仕事でも、笑顔をお忘れずに!(スイス)
- 3 手洗い習慣を楽しく身に付けてもらうため壁画で周知(ブエルトリコ)
- 4 はしかで苦しむ子どもの治療を行うウクラ医師(中央アフリカ共和国)
- 5 コレラから回復した赤ちゃん。笑顔になって良かったね!(イエメン)
- 6 マラウイの活動の指揮を執る、末藤千翔(フィリピン)



ACTIVITY NEWS IN FOCUS

活動地から、感謝を込めて。
今年の小さな“前進”をお届けします。

国境なき医師団(MSF)の活動に、新型コロナウイルス対応という困難が加わった2020年。そんな中でも、活動地では、一歩前に進んだ瞬間がたくさんありました。スタッフが現地へ向かい、患者さんが回復し、新しい命が誕生する……。これらは全て、皆さまからのご支援なくてはできなかったこと。そんなシーンの一部を、感謝を込めてお届けします。



- 7 MSFの新型コロナ治療センターで回復し、無事に退院する男性(イエメン)
- 8 MSF初参加の前田健太。コロナ禍での調達に尽力(ナイジェリア)
- 9 8月に再開した、地中海の捜索・救助活動で救出された人びと
- 10 北東部で約2年続いたエボラ出血熱がついに終息。喜ぶスタッフ(コンゴ民主共和国)
- 11 難民の少女はMSFの小児クリニックで治療を受けることができた(ギリシャ)

コロナ禍で進む 命の危機をくい止める!

新型コロナウイルス感染症対応 中間報告

写真から振り返る、ダシュ・バルチ産科病棟が支えた母と子の命

日本のチームがバングラデシュで調査 現場の課題を分析し赤ちゃんの命を守る
【連載】支援者のひろば／もっと知りたい! MSFスタッフの素顔



特定非営利活動法人国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ
0120-999-199 (平日9:00~18:00 土日祝、年末年始*休業 通話料無料)
*2020年12月29日から2021年1月4日まで休業
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST 早稲田 FIRST 3階
Tel: 03-5286-6123 (代表)

新型コロナウイルス感染症対策により、場合によっては寄付に関するお手続きや領収書の発行といった、事務対応に遅延が発生する可能性があります。何卒ご了承くださいませようお願いいたします。

www.msf.or.jp

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撃する世界の人的危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、共に考えていただくための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機にひんした人びとの緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする海外派遣スタッフと、現地スタッフ、事務局スタッフの合計約4万5000人が、世界70カ国以上で活動しています(2019年度)。

アンケートのお願い

- ◎今号に関して、次の質問にお答えください。
- ①特に印象に残った記事を二つ、理由と共に教えてください。
- ②あまり興味が持てなかった記事があれば、理由と共に教えてください。
- ③ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。

アンケートにご協力いただいた方の中から10名様にMSFオリジナルランチバッグ(右写真)を差し上げます。

お寄せいただいた個人情報は、プレゼントの発送・アンケートの分析ならびに各種ご案内の送付などに利用いたします。詳しくは国境なき医師団日本の個人情報の取り扱いに関する基本方針をご参照ください。→<https://www.msf.or.jp/policy/> なお、プレゼント当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

郵送 郵便はがきに、ご住所、お名前、支援者番号、年齢、職業、アンケート回答をご記入の上、左記の住所までお送りください。2020年12月末日消印有効

宛先 国境なき医師団日本・『REACT』係

WEB トップページ → MSF図書館 → 読み物 → 『REACT』

2020年12月末日まで受け付け

www.msf.or.jp/react202012



© MSF



スマートフォンから



右上／患者さん・スタッフを感染から守るため、医療用防護具の準備はどの活動地でも必須だ。
 左上／感染が疑わしい人への対応ができるよう、各地でスタッフのトレーニングを実施した。
 左下／医療施設内で感染を広げないために、待合室で患者さんの症状をまず確認。写真はギリシャの難民キャンプにある、MSFのクリニック。



新型コロナウイルスがまん延した各国の活動地で、MSFは医療施設内の動線分け、感染の疑いのある患者への対応フローの策定、医療用防護具類の使い方などのスタッフトレーニングを速やかに実施しました。MSFが運営する病院のみならず、他の医療施設でも同様の感染対策を行えるように、各国の保健省、自治体への支援も展開しました。しかし、2020年、MSFが強く意識して活動したこと——。それは、意外に思われるかもしれませんが、既存の医療援助を維持し続けることでした。エボラ出血熱など、過去の感染症流行時の経験から、最大の脅威はウイルスではない。通常診

取り組み
医療を届ける

感染予防・制御策を徹底。既存の活動をできる限り維持

療の中断と医療機関受診への恐怖だ」という教訓があったからです。「新型コロナウイルス感染症の対応だけに集中するという選択肢は、私たちにありませんでした」。新型コロナウイルス感染症タスクフォース・医療分野連絡調整係のケイト・ホワイトはこう話します。

女性たちの命の危機が加速

パンデミック（世界的大流行）時には医療従事者や医療物資の移動が困難になり、医療の供給が滞りがちです。今回のコロナ禍でもシリア、エルサルバドルなどでは、人手や物資不足などの理由で診療を一時中断せざるを得ない局面がありました。医療体制のみならず、感染を怖がる人の受診控えも後々、大きな健康被害を招きます。糖尿病などの持病が重症化したり、結核やHIV／エイズなどの中長期的治療が必要な人たちの命

が危険にさらされたりすることも。中でも、リプロダクティブ・ヘルスケア（性と生殖に関する医療）の中断の影響は深刻です。妊産婦への医療サービスが縮小された結果、リスクの高い自宅分娩が増加。家庭内での性暴力の増加も懸念されました。南アフリカ共和国のあるスタッフはロックダウンの影響で中絶手術を受けられなかった女性を目撃し、「本当に悲しい例です」と訴えます。こうした事態をくい止めようと、MSFは各国で運営する全ての医療施設で、冒頭のような感染予防・制御策を徹底した上で、既存の活動の維持に注力したのです。

感染収束のめどが立たない環境下では、新たな援助方法の模索も大きな課題でした。病院に来る回数を減らせるように、IT環境が整っている地域では、オンラインによる遠隔治療や服薬指導を強化し、SNSを活用し

スタッフの声

「新型コロナウィルス以外で亡くなる人にも目を向けてほしい」



どうつみきこ
医療コーディネーター 道津 美岐子
(2020年3～7月、スーダンで活動)

私はスーダンの首都ハルツームで、母子保健や難民キャンプで一次医療を提供する活動を担当し、3月からは、新型コロナウイルス感染症の予防・制御策、スタッフの安全管理に取り組みました。

現地では、「コロナ、コロナと言うけれど、アフリカではそれ以外の理由で亡くなる人が多いのに……」と話す人が少なくありません。スーダンでは、3000以上の医療施設、薬局がサービスを停止。鎮痛薬、降圧薬などの常備薬さえ手に入らなくなり、また、人工透析を受けられずに亡くなる人もいました。新型コロナウイルス以外の命の危機を、国際社会が理解する必要性を感じました。

脅威は新型コロナウイルスだけでなく。コロナ禍で進む命の危機をくい止める！

新型新型コロナウイルスの感染拡大が世界各地の公衆衛生に大きな影を落とすにつあります。しかし、残念ながらコロナ対応の陰に隠れた人びとの命の危機に注目する報道はまだまだ少ないと言わざるを得ません。予防接種の機会が減り、別の感染症の流行が危惧され、輸送制限による食糧配布の遅れから栄養失調の深刻化も懸念されます。だからこそ、「いま、通常の医療援助活動を止めるわけにはいかない」。国境なき医師団(MSF)が伝えたいこと、最新の取り組みをご紹介します。



コロナ禍でも新しい命は誕生。イラク・モスルでMSFが運営する病院では、赤ちゃんを産んだ母親に健康に関する情報を伝えている。

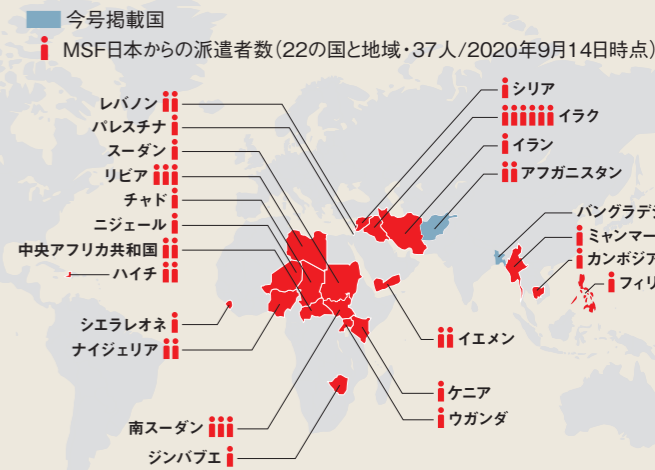
特集

『REACT』2020.12 CONTENTS

- 特集
- 02 コロナ禍で進む命の危機をくい止める！
 - 06 新型コロナウイルス感染症対応中間報告
 バングラデシュ
日本のチームが調査
現場の課題を分析し赤ちゃんの命を守る
 - 07 アフガニスタン
写真から振り返る、
ダシュ・バルチ産科病棟が支えた母と子の命
 - 08 支援者のひろば
 - 09 もっと知りたい！MSFスタッフの素顔
宮澤 明子（事務局員&ロジスティシャン）
 - 10 MSFインフォメーション
 - 11 ニュースレターが変わります！
遺贈寄付専任担当のご紹介

裏表紙 IN FOCUS
活動地から、感謝を込めて。

表紙：新型コロナウイルス感染拡大を受け、防護服を身に付けて活動に当たる国境なき医師団(MSF)のスタッフ。世界中の活動地にいるスタッフは、いま新たな脅威と向き合っている。





©Fati CANALI / Magnum Photos for MSF

患者さんの声

「心のケアが必要な息子。気晴らしの散歩もできません」

ヤシン君(9歳、上写真)の父モフタルさん
私たち家族は紛争が続くアフガニスタンから逃れ、昨年ギリシャ領レスボス島の難民キャンプでテント暮らしを余儀なくされています。最初の2週間で、息子・ヤシンの変化に気がきました。毎日夜中に悪夢に襲われ、叫び

ながら目覚めるのです。やがて、息子は近所で盗みを働き、ナイフを持ち歩くようになる。ロックダウン以降、難民キャンプでは暴力事件が続く、いっそう耐え難い状況です。いまは週に1回、MSFの小児診療所で心のケアを受けていますが、気晴らしに外を歩くこともできません。息子が安心できる環境で暮らせる助けが私たち家族には必要なのです。

コロナ禍で、移民・難民など弱い立場に置かれた人びとの環境がさらに悪化するだけでなく、一般の人びとも経済不安や社会的孤立などのストレスを抱えるように。医療従事者らも例外ではありません。緊張感のある仕事をしながら差別や偏見とも闘う日々が続く、うつ病や不眠症を発症する例が増えています。

もともとMSFでは心のケアのプログラムが多数ありますが、現在、一部地域では電話カウンセリングを展開。インド・カシミール地方では、「周りの人に気付かれずに治療できる」と好評で、対面ケアのときよりも患者数が増えています。

取り組み
心のケア

既存の活動に加えて
電話カウンセリングも



©Chika Suefuku / MSF

右/アフリカのエスワティニでは、スマートフォンで撮った動画を使って遠隔診断をし、結核治療をサポートする取り組みも。左/フィリピン・マラウイでは、高血圧、糖尿病などの患者さんらに服薬に関するアドバイスや、感染予防策を伝えるリーフレットを配布。



©Jakub Hein / MSF

スタッフの声

「こまめに電話し患者さんの治療意欲をキープ」

ひらい あゆこ
医療コーディネーター 平井 亜由子
(2020年1~5月、ソマリランドで活動)



私はアフリカ大陸東端のソマリランドで、複数の結核の治療薬が効かない多剤耐性結核(MDR-TB)の治療支援に関わり、3月からは新型コロナウイルス対応も行いました。MDR-TBの治療は従来、注射薬が中心でしたが、新薬が開

発されて以降、MSFでは経口薬による長期的な治療を推奨しています。注射薬でも経口薬でも、途中で治療をやめると薬への耐性ができて、薬が効かなくなります。そのため、患者さんの治療意欲をキープすることがとても重要。通常の在宅治療では1カ月分の薬を渡すのですが、コロナ禍では、通院回数を最小限にできるように、多めの2カ月分を渡し、その後は電話でこまめに経過観察を行いました。

ソマリ人は、夏は酷暑のため内地に移動したりする人もいますが、幸いほぼ全員が電話を持っているので、「病院に来てほしい」と伝えれば約束通りに来てくれました。治療を継続してもらう上で、コミュニケーションの取りやすさは大切でした。

取り組み
医療を届ける

自宅での治療をサポート

取り組み
医療を届ける

不安を解消する



©Fati CANALI / MSF

MSFの健康教育チームは、感染症に関する根拠のないうわさに惑わされないように、人びとと信頼関係を築きつつ、正しい情報を伝えている。

人びとの声に耳を傾ける

とはいえ、バングラデシュ、コンゴ民主共和国、アフガニスタン、ナイジェリアなど多くの国では、患者数が大幅に減少。感染リスクや感染による差別を恐れる以外に、「病院で人体実験が行われている」「毒を注射される」など根拠のないうわさが各国で流れ、それを信じてしまう人もいたからです。病院を過剰に怖がった結果、搬送された時には手遅れとなる例も。こうした人びとへの根気強い啓発活動も急務でした。

「子どもを無事に産みたいと言う妊婦や、マラリアや栄養失調になった子どもの治療を希望する親に対して、まずはどんなことが不安なのか、その声に耳を傾けることから始めなければなりません」。前述のホワイトはこう話します。その上で、冒頭のような感染予防・制御策を丁寧に説明し、通院しても健康被害を受けないと納得してもらうことで、ようやく通常の治療が維持できるのです。

MSFが、新型コロナウイルス感染症の制御だけに没頭するわけにはいかない理由がここにあります。

● た健康教育キャンペーンを積極的に展開。医療スタッフ向けには、感染予防と制御策に関するオンライン研修も頻繁に行いました。

取り組み
子どものケア

各地で工夫を重ねて
適切な治療を届ける

世界各地で集団予防接種が中止や延期に追い込まれている影響で、子どもたちがはしかなどのワクチンを接種できず、罹患リスクの上昇が予測されています。また毎年多くの子どもの命を奪うマラリア対策の遅れや、従来の食糧不足に加え、コロナ禍で輸送制限の問題も重なり、飢餓に苦しむ子どもたちの増加も心配されるどころです。

MSFはシエラレオネなどの村で、マラリア予防になる蚊帳を配布する活動を継続中。また、子どもの二の腕の太さを測り、栄養状態を診断する「命のうでわ」と呼ばれるツールはこのコロナ禍でも活躍。身長計や体重計を使わず、迅速な診断から適切な治療への連携を進めています。



©Eliete Martins / MSF

上/栄養状態を判断する「命のうでわ」。重度の急性栄養失調児の増加が懸念されるニジェールの活用が進む。
右/マラリア予防に重要な蚊帳。大勢に配布することがかなわない代わりに、できるだけ人びとの元へ出向いて配布している。



©MSF



低体温症に陥り集中治療室に運ばれたロヒンギヤ難民の新生児。

疑問 何が理由で低体温に？
どこで冷たい空気にさらされたのだろう。

日本のチームがバングラデシュで調査 現場の課題を分析し 赤ちゃんの命を守る

新生児の死亡の大きな原因の一つである低体温症。各国で援助に当たってきた国境なき医師団(MSF)の看護師らによる、医療課題に新たな解決策を見いだす挑戦をお伝えします。

MSFジャパン・イノベーション・ユニットとは？

MSFの現場でより多くの命を救えるように、現場にある課題を分析し、解決策を立案するチーム。今回ご紹介する新生児ケアのほか、組織設計、データ分析、医療品の調達などに焦点を当てて活動しています。実は東京の事務局にこうしたチームがいるのです！詳しくは www.msf.or.jp/innovation/index_jp.html

「看護師の仕事を通して、たくさん赤ちゃんの死に直面しました。目の前で小さな命が消えていくのは、本当に悲しいことです」
そう話すのは、MSFの数々の現場で活動した看護師の京寛美智子(写真上)。彼女をはじめとしたMSFジャパン・イノベーション・ユニットが、新生児の死亡の大きな原因の一つである低体温症の課題解決に挑んでいます。
暖かい子宮の中から10度近く低い外界へ生まれ出る赤ちゃん。体温調節がうまくできないと、低体温症に陥ることが少なくありません。体温を保つためには保育器が一般的ですが、電力が安定しない地で活用するのは難しいです。新たな解決法を

目の前で消える命

発見 病院に運ばれるまでの間に課題がありそう！



救急処置室で医師たちから話を聞く調査チーム。

分析 赤ちゃんの動きを時系列にまとめると……？



「人間中心デザイン」の手法で、新生児に関わる人たちの動きを分析。

併せてご覧ください

【動画】低体温症から赤ちゃんを守るために
www.msf.or.jp/react20201207 スマートフォンから

※1 所属は2020年3月時点です。 ※2 ロジスティシャン：物資調達、施設・機材・車両管理など幅広い業務を担当。

新型コロナウイルス感染症対応 中間報告

今年の1月末に香港で活動を開始して以降、MSFは世界約70の国と地域で新型コロナウイルス感染症への対応と、感染症対策を講じながら既存の援助活動の維持に努めてきました。途中経過として、欧州での活動(3~5月)、募金活動の進捗、日本での活動についてご報告いたします。

欧州での活動 (3~5月) 医療者と弱い立場に置かれた人びとへの支援を強化

3~5月、主な感染の流行地となった欧州で、以下の点を軸に緊急援助活動を展開しました。

- 1) 医療施設の感染予防・制御の支援**
感染者急増に医療機関はひっ迫。医療従事者の安全を確保できるよう、医療施設での感染予防・制御の支援やスタッフへのトレーニングを実施。また患者の受け入れ強化のため、テント施設の設置などでも支援しました。
 - 2) 高齢者施設への支援**
高齢者施設での感染をくい止めるため、感染予防対策や、入居者のサポートに追われる施設スタッフへの支援を行いました。
 - 3) 移民や難民、庇護希望者など弱い立場に置かれた人びとへの支援**
衛生状態の悪い環境で暮らす弱い立場にある人びとを対象に、衛生キットの配布や移動診療を行いました。
- 同時にこの時期は、感染拡大に備えて世界中の活動地で感染予防・制御策を徹底しました。



©Vincenzo Livieri / MSF
高齢者施設で暮らす人びとは家族との面会が禁止に。施設やMSFのスタッフは家族代わりとなって対応に当たった(イタリア、マルケ州)

	支援・直接的に管理した医療施設の数	: 59カ所
	支援した診療数(外来・入院)	: 2235件
	支援した高齢者施設、長期療養者施設の数	: 800カ所

※2020年3~5月、イギリス、イタリア、スイス、スペイン、ベルギー、フランスでの実績の合計

募金活動 7月末までに約1億ユーロのご支援をいただきました

3月に募集を開始した「新型コロナウイルス感染症危機対応募金」では、全世界での目標額1億5000万ユーロ(約180億円*)に対し、7月下旬までに約1億ユーロ(約120億円*)が集まりました。日本では延べ10万弱の個人・企業の皆さまから23億円近くのご支援をいただきました(7月31日時点)。この場を借りてお礼申し上げます。
支援金は、長引く紛争の影響などによって救急医療体制づくり等に特に資金が必要となる、イエメンや南スーダン、コンゴ民主共和国や、感染者と死者が急増しているブラジルといった国や地域での活動に充てられる予定です。今後も用途などの詳細を随時ご報告してまいります。

*1ユーロ=120円で換算



©Agnes Varraine Leca / MSF
より多くの患者を受け入れられるよう、大学病院の敷地内にテントを設置(フランス、ランス市)

併せてご覧ください

新型コロナウイルス感染症へのMSFの対応
www.msf.or.jp/react20201206 スマートフォンから

日本での活動 長崎市と杉並区で援助活動に当たりました

MSFは日本各地のニーズも探り、その結果、5月に長崎市で、集団感染が発生したイタリア籍クルーズ船「コスタ・アトランチカ」の乗員に対する医療援助を実施。他の医療チームと共に長崎県の医療援助活動を支援しました。また5月下旬から6月上旬には東京都杉並区の保健所と連携し、感染拡大予防のための疫学的分析を支援しました。

今回の活動においては、いくつかの課題も残りました。MSFはこれまで日本では東日本大震災、熊本地震といった自然災害発生時に活動しており、感染症対応は今回が初となりました。自然災害と異なり対象地域が広範囲だったため活動の優先順位を付けることや、緊急事態宣言下で現地調査に基づく詳細な情報を収集することが困難でした。調査と並行して、死亡率の低下や医療体制の強化、他の医療機関や医療団体の活動の確認が取れたことから、このたびの日本での活動を終了しました。今後もMSFが必要とされる緊急事態に備えてまいります。

写真から振り返る、ダシユ・バルチ 産科病棟が支えた母と子の命



前の分娩は、病院に間に合わず自宅で産むことになってしまい……

病院に到着するとまっすぐに分娩室へ連れて行かれ、双子を出産したザキアさん。「お産は速くて楽だったので、自分は幸運だった」と話す彼女には既に子どもが4人います。とはいえ前のお産は、タクシーがなかなか見つからず、自宅で出産したのだそうです。ザキアさんに付き添う母親のサキナさんは、「お

ばあちゃんになるのはこれで18回目!」と誇らしげです。ザキアさん一家は少数民族のハザラ人で、10年前に安心を求めてダシユ・バルチ地区に移り住んだと言います。

ザキアさんと、双子のアッパス君とカシム君

やっと会えた息子。 家族との時間を大事にしたい

アフガニスタンの公共の場では、男女が一定の距離を保つという決まりがあります。そのため、母親が産科病棟を出るまでは、父は我が子に会えません。モハマドさんが初めての子ファヤズ君に会えたのは、入院からおおよそ36時間後でした。普段は仕事で家を留守にすることが多いモハマドさんですが、「ファヤズも生まれたことで、もっと家族との時間を大切にしたいです」と笑顔で語りました。

モハマドさんと妻マルジアさん、ファヤズ君



2020年5月12日、アフガニスタンの首都カブールにあるダシユ・バルチ産科病棟が武装組織に襲撃され、妊産婦と国境なき医師団(MSF)のスタッフが命を落としました。14年から、貧困に苦しむ人びとへ無償で産科救急や新生児ケアを提供してきましたが、患者さんやスタッフの安全を考慮し、私たちは活動中止という苦渋の決断をしました。これまでの命の記憶をお届けします。

スタッフの声

「医療を必要とする多くの患者さんがいることを忘れてはなりません」

助産師 ザフラ・コチザド

襲撃のあった5月12日、私たちはいつもどおり勤務していました。この攻撃は、妊産婦と新生児の死亡率を減らすための何十年にもわたる取り組みをも破壊しました。私たちは同僚や患者さんを亡くし傷つきましたが、目の前にはいまでも医療を必要とする人びとがいます。私たちは、国の未来を生み出す妊産婦のベッドサイドにいたのです。そのことを忘れてはなりません。

併せてご覧ください

亡くなった人びとを悼む動画を公開中
www.msf.or.jp/react20201208



スマートフォンから

Photo: ©Sandra Calligaro

支援者のひろば

国境なき医師団(MSF)は、皆さまからの心強いサポートによって成り立っています。今回は、その行動力で私たちを支えてくださっているボランティアスタッフの脇村良二様をご紹介します。

「お世話になった社会に「行動」する(こと)でお返しをしたい」



脇村 良二様

定年退職後は、社会に貢献したいと考えていました。国際交流や紛争問題にも興味があり、MSFには以前から寄付をしていたので、「行動」でも支援したいと、ボランティア活動に参加しました。

最初は事務局で、MSFの出張授業に参加した子どもたちが書いた感想文の入力作業をしていました。ただ入力するだけでなく、子どもたちの気持ちに触れてみたくなり、そこで、実際に出張授業のサポートをしたいと申し出ました。子どもたちの反応をじかに見ることで、腑に落ちることがたくさんありました。

昨年開催されたイベント「エントレスジャーニー展」のサポートでは、来場者に活動について伝えるためにはまず自分が理解する必要があると思い、スタッフの方に質問して情報を集めるように努めました。寄付者としてイベントに参加するよりも、世界の状況やMSFの活動への理解が深まったと思います。社員の頃、自分がここまで

ボランティアとしてMSFに参加しませんか？ まずはご登録をお願いします

日本事務局では、イベントや出張授業、事務局業務をサポートしてくださる方を必要としています。ご興味のある方は、ぜひサイトからご登録ください。募集がある場合、事務局からご連絡致します。



スマートフォンから

ご登録は www.msf.or.jp/react20201209

これらしたのは、自分一人の力ではなく、周囲の人びとが支えてくれたからだということを実感していて、これから「誰かのため」に自分を役立てたいという思いが根底にあります。それは、MSFでなくてもよかったのかもしれません。でも、ボランティアとして参加してみても、支援先としてMSFを選んだことは間違いではなかったと確信が持てました。これからも支援を続けようと思います。

実際に活動地に行く「海外派遣」と、活動を後方でサポートする「事務局」。実は共に経験しているスタッフがいるのです。今回は、どちらも経験するスタッフをご紹介します。

事務局員&ロジスティシャン



「私にもできることがある!」
その発見が参加する後押しに!

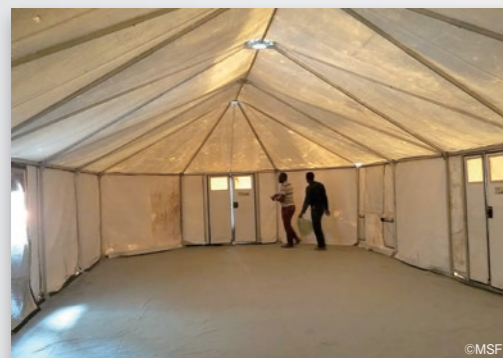
事務局員&ロジスティシャン
宮澤 明子

日本事務局で調達の仕事の募集を偶然見つけたところからMSFとの縁は始まりました。就職した企業で同じような仕事をした経験があったので「私にもできることがあるんだ」と入団しました。事務局スタッフとして働くうちに、次のステップとして「海外派遣」を意識しました。もともとハードルが高く感じていましたが、ロジスティシャンの中に「調達」という仕事があることを知り、「トライしてみよう」という気持ちになったのです。

ウガンダではエボラ出血熱が発

生し、緊急援助の準備のための調査チームが現地に入ることに、必要な物のリストが届いた後、チームで在庫を確認し、不足があればすぐに手配するなどして、翌日には必要物資を現場に届けることができました。現場のチームや現地保健省からもねがいの言葉をかけてもらい、達成感を味わった瞬間でした。

緊急援助の現場で迅速に対応できるのも皆さまからの寄付があるからだ、現場にいたことでより一層感じましたね。



上/必要物資のテント。古いものは使えない可能性もあり、医療援助の妨げにならないよう組み立てて確認。
下/「倉庫の整理整頓も私たちロジスティシャンの仕事の一つです」と語る宮澤。

スタッフへの質問、大募集!

「活動地での自由時間は?」「事務局ではどんなことをしているの?」など、気になったことを何でもお寄せください。裏表紙に記載の住所に、「スタッフへの質問係」と添えてお送りください。

来年から、ニュースレターが変わります。

昨年の「REACT 2019年12月号」に同封したアンケートで、「REACT」へのご意見、および、ニュースレター全般へのご要望を伺ったところ、約4300人の方々にご回答くださいました。ありがとうございます！皆さまからのご意見をもとに、ニュースレターは来年、リニューアルいたします。ここでは寄せられたご意見の一部と、リニューアルの予定を少しですがご紹介いたします。

Q1 ニュースレターをお読みいただいている理由は？

- 1位 ここで見られない記事や写真があるから……2738票
2位 支援がどう役立っているか知りたいから……2637票
3位 関心のある情報が手に入ると思うから……1547票

皆さまからのご意見

「新聞やテレビの報道では教えてもらえない情報ばかりで勉強になる」

「支援を受けて、人びとの生活がどう変わったのかもっと知りたい」

赤 現地の様子に関心を持ってくださりありがとうございます。今後、患者さんや活動地の変化をお伝えできる機会を増やしてまいります。

Q2 「REACT 2019年12月号」で印象的だった記事は？

- 1位 特集 地中海で助けを待つ人びとの元へ……2942票
2位 難民のクセイさん 新しい人生へ……2650票
3位 日本からのスタッフ派遣状況……1891票

皆さまからのご意見

「クセイさんの記事から、助けられる立場の人が助けられる側になるという希望、未来が見えました」

「スタッフ派遣状況の地図が小さくて読みづらいです」

赤 前に向かう人びとのストーリーは、これからも取り上げます！ また、「読みづらい」という指摘をいただいた箇所は地図以外にもありました。改善してまいります。

Q3 今後どんなニュースレターが届くことを期待しますか？

- 1位 活動中の苦勞や苦悩、ジレンマなどがわかる……2413票
2位 もっと最新の活動状況がわかる……2108票
3位 もっと海外派遣スタッフのことがわかる……1805票

皆さまからのご意見

「活動中、うまくいかないこともあるのでは。そのこともっと知りたい」

「スタッフの皆さんはなぜそこまで人のためにできるのか、学びたい」

「冊子は読みやすいが、スマホにも送られると外出先でも読めて便利だと思う」

赤 活動中のジレンマにまでご関心をお寄せくださりありがとうございます。今後、そのような面と共に、スタッフのMSF参加への思いなどの紹介も強化予定です！

上でご紹介した質問は全て複数回答です。

どうぞお楽しみに！

遺贈寄付専任担当をご紹介します。

遺言によって遺産の一部または全てをMSFに託していただく遺贈寄付。大切な遺産を、紛争や貧困、感染症などで苦しむ世界の人びとの命を救う活動に役立てていただくことができます。まず私たちにご相談ください。秘密厳守、無料でご相談をお受けしています。

お気軽にご相談ください。お電話をお待ちしています。(①自己紹介 ②ひとことメッセージ)

ご相談は
お気軽に

いまおれいこ
今尾 礼子

- ①前職は外資系ビジネスコンサルタントと教育支援の国際NGO。本が好きで、最近ミヒャエル・エンデの「モモ」を読み返して感動しました！
②ご遺贈に金額は関係ありません。大事なお金をどう生かすか考える中で、アイデアを探す感覚で気軽にお電話ください。



おきの かずのぶ
荻野 一信

- ①入団6年目、遺贈寄付一筋にやってきました。趣味はひとりキャンプと古美術鑑賞です。
②ご遺贈を検討される過程では、ご不安なことも出てくるかと存じます。ぜひお気軽にご相談ください。お待ちしております。

遺贈寄付ご相談ダイヤル(ご相談無料)

03-5286-6430 (平日10:00-17:00) 担当: 荻野・今尾

▶ 新事務局長に村田慎二郎が就任しました

2020年8月24日、国境なき医師団(MSF)日本事務局の責任者である事務局長が交代し、新たに村田慎二郎が就任いたしました。1992年に設立されたMSF日本事務局にとって、初めての日本人事務局長となります。村田は2005年にMSFに参加。非医療従事者として経験を積み、2012年には日本人初の「活動責任者」となり、シリアなどで国レベルでの医療援助活動に関する交渉などに従事。延べ10年以上に及ぶ派遣地での経験と、直近の米大学院留学で得た新たな知見をもって、世界中のMSFの活動に貢献できるようMSF日本をリードしていきます。村田から支援者の皆さまへ、ごあいさつのお手紙を同封しております。ぜひご覧ください。



▶ 寄付に関してのご案内

■ 寄付の税制優遇措置(寄付金控除)について

MSF日本への寄付は「確定申告」を行うことで寄付金控除の対象となります。申告の際には、MSF日本が発行した領収書を添付してください。なお、**年末調整では寄付金控除の申請は行えません**のでご注意ください。

■ 領収書のお届け時期について

「毎月の寄付」でご支援の皆さま

- 2021年1月下旬頃までに、2020年度年間領収書をご登録住所宛にお送りいたします。

「今回の寄付」でご支援の皆さま

- MSF日本への入金確認後、その都度発送しております。
- 1年分まとめて発送の設定をされている方には、2021年1月下旬にご登録住所宛にお送りします。

※例年、お送りした領収書が宛先不明で返送されるケースが多く発生しております。領収書をご希望の方は、11月末を目安に**公式サイト上のマイページより登録住所のご確認/ご変更**をお願いいたします。



©木下綾乃

詳しくはこちら

▶ www.msf.or.jp/react20201210_1

マイページはこちら

▶ www.msf.or.jp/react20201210_2

■ 2020年度の税制優遇措置(寄付金控除)対象の寄付申し込みについて

- ゆうちょ銀行振り込み：2020年12月末日付の振込完了分まで
- クレジットカード決済：2020年11月以降のお申し込みは2021年度(来年度)の寄付となる場合がございます。ご了承ください。

▶ 支援者の皆さまへご報告

■ 虐待・搾取・ハラスメントのない活動環境の実現を目指して

MSFでは、いかなる虐待や搾取、ハラスメントも許さない活動環境づくりを推進しています。不正行為を予防、発見し、それに対応するため、組織内外からの通報制度を設けています。この制度はスタッフだけでなく、活動地の患者さんや地域社会にも奨励されています。

2019年、申し立てられた苦情は322件で、そのうち154件が虐待ないし不適切行為に当たる事態と確認されました。104件が性的虐待・ハラスメント・搾取など何らかの形態の虐待、50件がその他の不適切行為でした。結果、57人のスタッフを解雇しました。

前年比で通報数は10%減りました。しかし、活動地のスタッフの90%を占める現地採用スタッフや患者さんなど、声を上げにくい人びとからの通報が少ないことは課題と捉えています。引き続き、虐待などの行為のない活動環境を目指して取り組みを続けてまいります。

今後これらの問題についてMSFは真摯に向き合い、引き続き透明性を持って皆さまにご報告いたします。

■ MSF内での差別・人種主義に関する取り組み

MSFは1971年の設立以来、独立・中立・公平という理念の下で活動を続けており、団体が維持してきた価値観に反する、人種主義を含む全ての差別を容認していません。団体の憲章で規定された基本理念を遵守し、互いを尊重する行動と多様性の浸透を優先課題として、誰もが活躍できる職場環境を構築するための人事方針や行動規範の策定を進めてきました。また、差別を含むあらゆる種類の不正行為を組織内外から通報できる制度を設けています(左記参照)。

現在、団体内では差別や人種主義に関する活発な議論が続いています。誰もが医療・人道援助活動に貢献できる、これまでに以上に多様で公平、公正な団体となるよう努めてまいります。

国境なき医師団日本 事務局長 村田 慎二郎

詳細はこちらからご確認ください。

www.msf.or.jp/information/detail/msfj20200622.html
www.msf.or.jp/information/detail/msfj20200729.html